

## Asia and Oceania



Ron Crocombe (南海研客員研究員)

For the past 200 years the main external relations of the peoples of Oceania have been with Europe and north America. For several decades this has been changing due to a growing proportion of interaction with Asia in trade, investment, aid, political interaction and a range of other activities. The legacy of English language (and for some French or Spanish), Christian religion, and many elements of Euro-American culture mean that there is inadequate awareness in either the Pacific Islands or Asia of the other. Nor is there adequate preparation for the fact that interactions with Asia will be the dominant external contacts for Oceania in the 21st century. It is therefore in the interest of all concerned that the relationships be better understood.

For several decades I have advocated that more Pacific Islands students study in those nations of Asia which are of most significance to Oceania, in order to acquire language and an understanding of the social, political and economic contexts, and to make personal contacts. I have also advocated, with little

result, more emphasis on Asia in Pacific Islands curricula in schools and universities, and in research, publication and media. With the Pacific Islands being so small in population and economic power, it is also important for them to enhance awareness of Oceania in Asia.

Japan interacts with the Pacific Islands, on most criteria, on a much the largest scale of any Asian nation. And within Japan, only the University of Kagoshima has a Research Center for the South Pacific. It was therefore a wonderful opportunity to be invited to the Center to begin work on a book on ASIA AND THE PACIFIC ISLANDS. In the course of research at the Center I also visited several other parts of Japan, presented some lectures and seminars, edited some papers for colleagues in Japan and abroad (including two Ph.D. students I supervise in the South Pacific), and was able to assist some Japanese

### この号の内容

巻頭言 .....	1
寺師慎一教授追悼 .....	2
定例研究会(第90~94回) .....	6
海外出張雑感 .....	10
海外出張・研修の記録 .....	12
最近の出版物 .....	14
センターの動向 .....	15

students and academics who study in or about the Pacific Islands. The experience should also enable me on my return to the South Pacific, to facilitate interaction by South Pacific academics, students and media personnel with Japan and its neighbors.

The Kagoshima University Research Center for the South Pacific plays a vital role in promoting academic awareness of the South

Pacific within Japan (and within Asia more broadly, for its publications are widely read), and in widening research opportunities and horizons for South Pacific people. It is understood that the Research Center completes its ten-year funding contract early in 1998. It is very important for the interests of both Japan and the South Pacific that the contract be renewed and the activities expanded.

## 寺 師 慎 一 教 授 追 悼



すでに『南海研だより』31号でお伝えしましたように、南太平洋海域研究センター専任教官で第3課題「保健環境と疾病の研究」を担当していた寺師慎一教授

が昨年10月12日に急性心不全で逝去しました。享年61歳でした。

寺師教授は1935年に鹿児島県に生まれました。61年に鹿児島大学医学部を卒業後、66年に同大学より医学博士の学位を授与され、その年に鹿児島大学医学部病理学第一講座に助手として採用されました。74年に助教授に昇進し、その後、82年に本研究センターの前身である南方海域研究センターに教授として赴任して以来、成人 T

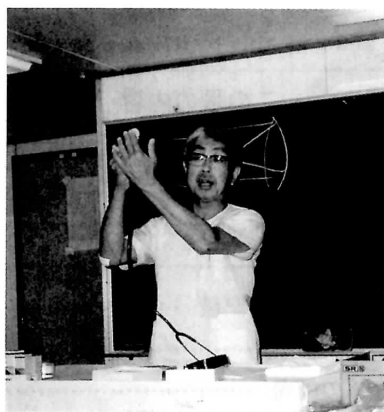
細胞白血病の疫学的調査を中心に、医学の専門家としてセンターの活動に多大な貢献をしてきました。なお、センター在任中の研究業績を別に付しています。

ここに謹んでご冥福をお祈りし、井上晃男センター長ならびに、寺師教授と共同研究をおこなっていた兼務教官である北野元生教授の追悼の文を掲載いたします。

### 寺師教授との12年

井上晃男（南海研センター長）

時のたつのは早いもので、寺師教授が亡くなって既に5ヶ月である。現センターの前身の南方海域研究センターに彼と一緒に赴任したのが昭和57（1982）年7月、約14年間同じ釜の飯を食ったことになる。それまで彼は医学部、私は水産学部に所属し、キャンパスが違うせいもあって一面識もなかった。物静かで、意志の強そうな、私とは正反対の性格の持ち主だというのが第一印象である。話をしてみると、同じ年に小学校に入学した同級生であること、つまり同時に定年を迎えることが分かり、一層の親しみを覚えたものである。それ以来他の専任教官や兼務教官ともどもセンターの中核となってやってきた。研究業績などは他で紹介することにして、彼にまつわる数々の思い出の一つを書いてみる。



センターがほぼ毎年実施してきた船を利用したの総合学術調査では、何回も一緒に乗船し、文字どおり起居を共にした。この調査のほとんどの場合、彼は船医を兼ねていた。調査地までの往復の航海中、夜はいつも食堂でウイスキーや焼酎などの強い酒を一気に流し込み、一向に酔った風もなく、にこにこしながら時々人の話に茶々を入れ、明け方まで平気で若い連中とつき合っていた。にもかかわらず朝は誰よりも早起きであった。船医室のドアには、“24時間営業中”の看板がぶら下がっており、不調を訴える隊員や船員の治療には時を分かつた。彼がいれば安心だったが、一体いつ眠るのか、細い身体はどこに底なしの体力が潜んでいるのか、不思議だった。このような酒にも船酔いにも強く、また体力もあった彼が、身体に異変を感じたのは、平成3年度のパプアニューギニア調査の頃である。当時彼はセンター長だったため、総括責任者として何とか我慢して調査をやり終えたが、この航海・調査中は全く食欲がなく、顔色はさわめて悪く、見ていても気の毒な程であった。食道ガンの手術を受けたのがこの調査から帰ってきた直後の5年前である。術後の経過は順調で、半年後にはほぼもと通りの体力に回復した。しばらくは普通に勤務していたが、様々なストレスのためか精神的にも参っていたようで、食欲不振から栄養失調に陥り、入退院を繰り返すようになった。このようにして亡くなる前の約2年間は、昔の彼からは想像できない程の弱々しい、気力のない姿を見せていた。でも亡くなるとは夢にも思わず、訃報に接したときは、一同まさかという思いのみであった。ご家族から話を聞く機会がなく、ほぼ一ヶ月は彼と会っていなかったのも、一体どのようにして亡くなったのかは分からない。仕事ができる新センターを考えよう、一緒に定年で引退しようという約束も反故になってしまった。返す返すも残念である。今となっては彼の冥福を祈るのみである。

## 寺師慎一教授の思い出 —追悼にかえて—

北野元生（歯学部）

毎年、本学医学部の肝いりでアジア医学研究会という会合が桜ヶ丘地区の医学部内で開催されている。桜ヶ丘地区の医学部、歯学部、および医療技術短期大学部に在学中の外国人留学生や長期滞在中の外国人研究者が一同に集まって、ビールパーティーつきの研究発表会を開いて、彼ら同志の情報交換や、彼らとわれわれとの親睦を図ることを目的としている会合である。私が鹿児島大学に赴任してきたのが1986年（昭和61年）であったが、丁度同じ時期に私どもの講座に新入りのウルグアイからの留学生（研究生、のちに院生）がいたこともあって、彼の付き添いを兼ねてその年の研究会に出席させていただいた。このときの研究会の詳しいスケジュールについては、殆ど忘れてしまったが、日本側を代表するような形で、お一方がご自分のライフワークである南太平洋海域の島々でのATL（成人T細胞性白血病）ウィルスの浸淫状況についてと、嗜好品の関係で、この地域（のそのまた一部の地域）に特に発生頻度の高い口腔癌についての講演をされた。そのあとのビールパーティーでその方とご一緒した折に、われわれはお互いその会ではじめて会ったにも拘わらず、「北野先生、この地域の癌について研究しなさい。」と彼の癖である少しぎょろ目を光らせながら、命令口調で言われたのには少しびっくりした。その方が寺師慎一教授であり、南太平洋海域研究センター（南海研、そのころは南方海域研究センター）のスタッフであった。これが縁で、寺師教授、ついで南海研の教官や事務官の方々や全学横断的に組織された兼務教官の方々と今に至るまで、遠慮のないお付き合いをさせていただいている。

寺師教授と私とが本当に近しくさせていただいたのは、彼が病に倒れた（平成3年から4年にかけて）あとである。平成4年に、われわれ2名と内尾康人教授や國芳秀晴助手などの連名

で「ポリネシアのATLウィルスの検索」というような題で、海外科研費を申請したのであった。今だからいうけれども、私はポリネシアが何を指すのか、何処にあるのか、広いのか狭いのかさえ知らなかった。ポリネシアと言う地域には島々も多く、したがって国々も多い。それぞれに歴史がある。ハワイ諸島とニュージーランドもポリネシアに属する。こんなごく当たり前の話も殆ど知らずに、全く気楽に申請したのであった。実は申請していたことさえ忘れたので、ポリネシアでフィールドワークをするなどと言われたときには、心の準備は全くできていなかった。

しかし、申請が通ってしまった以上、このプロジェクトは遂行しなければならないのである。ただ何となくポリネシアと言えばタヒチであり、したがってタヒチあたりの探索を考えていた。ところが、タヒチはしっかりフランスに縛られていたので、というよりもフランス当局の手でATLウィルスの検索は充分なされていたので、われわれの入っていく余地はなかったようだった。ところがそれにも拘わらず、寺師教授は意地になって、何が何でもタヒチへ行くと言い張っていたのである。しかし、タヒチの政府要人から来るなど言うのを無視して、無理に押し掛けたら、これはすごくやっかいな国際問題になるは必定であった。他におよぼす影響は計り知れなかったであろう。そういう状況に立ち至って、私ははたと困惑してしまったのである。良く考えてみると、おそらく良く考えてみなくても、ポリネシア中の何処へ行くかの当てもなかったのである。

ここで救いの手とも言うべき、とても良いアイデア、すなわちタヒチのかわりに西サモアへ行けと言う案を出して下さったのが井上晃男教授(現・南海研センター長)であった。このことについては、井上教授にお礼の言葉をいくら言っても言い尽くせない気が今でもしている。何故なら、結果的に西サモアは大正解であった。何が正解と言って、目的の仕事が誠に滞りなく、かつ気持ちよく遂行できたからである。

西サモアでの仕事は平成5年度と6年度の2年間に3回行った。うち一回は彼一人の単独渡航による単独作業であった。病後すなわち手術後、寺師教授が一番元気が出たのがこの西サモア行きであったと思う。彼にとって、西サモアは唯一の楽園であったように思われる。先述のように、彼は病後であったせいもあって、日本国内では身体をいつもきつそうにしていたが、西サモアに滞在している間は、人が違ったように元気になった。食欲もあり、サモアの人々とお互い下手な英語をやりとりしながら、くつろいで会話をしていた。

科研のプロジェクトとして最終年の平成7年度には、西サモアのとなりのやはりポリネシアに属するトンガでの探索をおこなうことになった。しかし、この年、彼の健康状況はきわめて悪かった。心身ともに疲弊していた彼の姿を見ていると、トンガでのプロジェクトの遂行ができるかどうか甚だ疑問であった。彼は、しかし、トンガへ行くと言い張り、8月に入院加療の末やっと動けるようになった身体を、トンガまで運んだ。そこでトンガの政府要人とトンガでの検索についての交渉を行った結果、数カ月後に再びトンガを訪れてATLウィルスの検索を行う許可を得ることができた。しかし、その後の彼の健康状況には好転の兆しがみられなかった。一方小生の方も心臓の手術を受けなければならなくなった。結局、われわれは再びトンガの地を踏むことができなかった。

彼の死は全く唐突に私に宿題をつきつけることになった。彼の思い残したことは2つあるだろうと推察している。一つは西サモアでの検索結果をまとめて論文にすること。もう一つは、もし可能ならばトンガでの検索を遂行すること。西サモア、トンガの両国の検索を済まして、同地域でのATLウィルスの浸淫状況が明らかになれば、ハワイやタヒチのようにすでに検索が行われている同じポリネシアの島々の浸淫状況との比較検討が可能になり、さらには彼が彼のほぼ半生を費やした調査の結果、明らかにしてきたメラネシアやミクロネシアの諸国あるいは



諸地域の浸淫状況との比較検討が可能となる。これによって、本ウィルスの伝播ルートの解明はもちろんのこと、南太平洋ひいてはおそらく世界中の古代の人の動きがより明らかになり、医学的にも、人類学的にも、地理学的にもすばらしい仕事になるであろうことは、容易に想像できることである。

さて、寺師教授の死によって資料が四散したこともあって、西サモアの検索データをまとめることは必ずしも容易ではないが、西サモアでのウィルスの検索を精力的に行ってくれた、若き共同研究者の國芳秀晴助手が、現在、論文作成に頑張っていてくれている。もう一つの宿題のトンガでの検索であるが、検索遂行のためには多少の金が入用である。これについては、誰方に乞い願うか、あるいは誰方かを脅すかしてお金を都合しなければなるまい。この拙文をお読みになった方は、このことを良くお心に留めおかれんことを願う。

追悼文としては、きわめて散文的な思い出日記みたいになってしまった。向こう側で寺師教授が怒っているかもしれないが、お許しをいただきたいと念ずるばかりである。

## 寺師教授業績目録

(南方地域総合研究センターおよび南太平洋海域研究センター在任中の業績)

発表年、論文名、雑誌名または論文集名、巻(号)、ページの順に記載

### 1983年

“Associated Antigens Antibodies and Some Hematological Findings on Healthy Adults in Viti Levu, Fiji”. *The Prompt Report of the Second Scientific Survey of the South Pacific* (中野和敬・他編), pp. 108-112.

“Study of Anti-adult T-cell Leukemia Associated Antibodies in Solomon Islands”. *The Prompt Report of the Second Scientific*

*Survey of the South Pacific* (中野和敬・他編), p. 113.

### 1985年

「ソテツ種子含有配糖体(Cycasin)による実験的肝癌」『熱帯と肝臓病』(寺師慎一編, 鹿児島大学南方海域研究センター南方調査研究報告 No.6), pp. 1-21.

### 1986年

“Studies of Anti-adult T-cell Leukemia Associated Antigen Antibodies and Some Hematological Findings in Inhabitants in the Federated States of Micronesia”. *The Prompt Report of the Fourth Scientific Survey of the South Pacific* (中野和敬・他編), pp. 57-64.

### 1987年

“Study of Anti-adult T-cell Leukemia Associated Antigen Antibodies in Inhabitants of the Republic of Palau”. *The Prompt Report of the Fifth Scientific Survey of the South Pacific* (中野和敬・他編), pp. 62-65.

“Study of Anti-adult T-cell Leukemia Associated Antigen Antibodies in Inhabitants in Yap, the Federated States of Micronesia”. *The Prompt Report of the Fifth Scientific Survey of the South Pacific* (中野和敬・他編), pp. 66-70.

### 1990年

“Seroepidemiological Study of Anti-adult T-cell Leukemia/Lymphoma Associated Antibodies and Isolation of the Leukemia Virus from Human Lymphocytes in Papua New Guinea”. *The Progress Report of the 1989 Survey of the Research Project, “Man and the Environment in Papua New Guinea”* (中野和敬・他編, 鹿児島大学南太平洋海域研究センター南太平洋海域調査研究

報告 No. 20), pp. 35-38.

“Serological Aspect of Human T-cell Leukemia Virus Type-1 and Epstein-Barr Virus in Papua New Guinea”. *The Progress Report of the 1989 Survey of the Research Project, “Man and the Environment in Papua New Guinea”* (中野和敬・他編, 鹿児島大学南太平洋海域研究センター南太平洋海域調査研究報告 No. 20), pp. 39-41.

「パプア・ニューギニアにおける成人T細胞白血病の疫学調査」『南太平洋研究』10巻2号, pp. 263-274.

“Geographical Distribution of Subjects Seropositive for Human T-cell Leukemia Virus Type 1 in Papua New Guinea”. *Jpn. Jour. Cancer Res.* 81巻12号, pp. 1218-1221.

#### 1991年

“Seroepidemiological Study of Anti-adult T-cell Leukemia/Lymphoma Associated Antibodies in Papua New Guinea (1990)”. *The Progress Report of the 1990*

*Survey of the Research Project, “Man and the Environment in Papua New Guinea”* (林満・他編, 鹿児島大学南太平洋海域研究センター南太平洋海域調査研究報告 No. 21), pp. 45-48.

#### 1992年

“Seroepidemiological Study of Anti-adult T-cell Leukemia/Lymphoma Associated Antigen Antibodies in Lae and Wewak of Papua New Guinea (1991)”. *The Progress Report of the 1991 Survey of the Research Project, “Man and the Environment in Papua New Guinea”* (柄木田康之編, 鹿児島大学南太平洋海域研究センター南太平洋海域調査研究報告 No. 23), pp. 47-52.

#### 1994年

“Seroepidemiological Study of Anti-adult T-cell Leukemia Associated Antigen Antibodies in Western Samoa”. 『南太平洋研究』15巻1号, pp. 17-23.

---

## 南太平洋海域研究センター研究会発表要旨

---

第90回

1996年9月30日

### 青潮について

二村義八郎 (東京大学農学生命科学研究科)

海面の変色現象は、大別すると赤潮・澄潮・青潮になろう。赤潮はプランクトンの大増殖によって赤褐色から緑色になり、澄潮はプランクトンなどの懸濁物の少ない透明な水で多くは底層水の湧昇による。青潮は東京湾・三河湾でのみ観察される海面が乳緑青色になる現象で、表層水も低温・貧酸素になる。

多くの閉鎖的な内湾は、夏季に上下の水の混合が悪く、表層では赤潮状態となり、底層では

有機物の分解で無(貧)酸素状態になる。無酸素状態になると硫酸還元菌により海水中の硫酸イオンが還元されて硫酸イオンが生じる。離岸風によって表層水が沖に吹き流されるのを補って底層水が沿岸で湧昇すると、東京湾・三河湾では青潮が生じ、底生生物のへい死を伴う。両湾とも、夏季には接岸風が卓越し、離岸風が吹くのも短時間であり、青潮の時空間的規模は小さい。しかし他の内湾でも貧酸素の底層水が湧昇することがあるにも拘らず青潮は観察されていない。そこで着色物質の本体を青潮水と近隣の表層水の比較から、両湾の特徴を他の水域との比較から探った。

青潮は、海面からの上向放射輝度ならびに天空光の反射率も550 nm 付近に山があり、水中散乱光に起因する。粒径別の青潮水光束消散係数スペクトルから0.1~1.0 $\mu$ mの粒子の寄与が大きく、走査電顕による粒径分布も同様であった。走査電顕による懸濁態粒子の元素分析では硫黄とマンガンが通常の表層水や底層水よりも多かった。硫黄粒子は単体で球状かその集合体であった。マンガンに富む粒子については不定形で混在元素も多く、不明である。Mieの光散乱理論からも硫黄コロイドの光束消散スペクトルは青潮水に近いものが得られたので、着色物質は主として硫黄コロイドであると考えられる。しかしマンガンに富む粒子の寄与や両湾以外で青潮が発生しない理由は今後の検討課題である。

第91回

1996年10月28日

# Japan and Oceania: Possible and Probable Relations in the 21st Century

「日本とオセアニア：21世紀の関係」

Ron Crocombe (南海研客員研究員)

The past 100 years are a significant factor shaping the next 100– or at least the next generation. But they are far from the only factor. How the potentials are handled depends to a large extent on the actions of people today.

From the late 1800s Japan's technology, economy, education and population expanded. As with all peoples, this generates territorial expansion. Workers move in search of better pay and prospects, businessmen for commercial opportunity, governments to expand their power and influence. All three moved into the Pacific Islands, in competition with several economically and politically successful countries of northwest Europe (and their derivatives) which began the same process a little earlier in competition with each other.

Of the potentials for the future, I will concentrate on several of many. First is the need for young people of both regions to mix in climates of positive mutual growth. This is happening in several fields (eg. formal educational exchanges, worker exchanges of the kind long established with Australia and New Zealand but not yet with the islands nations, creative and mutually beneficial commercial investments), but the potential is vastly greater than has yet been achieved.

Positive elements in the relationship include Japan's success (all humans are impressed by success) with consequent high income, high technology, high standards of education, health and social services, and growing awareness of it being in its own interest to know its neighbors better. Another positive potential is Japan's strong desire for support in the United Nations and other international forums (there are 10 UN General Assembly votes in the South Pacific Forum, and 16 votes in many of the international agencies such as WHO and UNESCO). Negative elements include the difficulty of learning another language and culture, the high money cost of interaction with Japan, some restrictive aspects of government and society at both ends, and the legacy of World War II. All can be ameliorated.

The main emphasis of the talk is on how the positive elements can be optimized and the negative minimized to the mutual benefit of both Japan and Oceania in the coming generation.

第92回

1996年11月25日

# 鉢水母から見た環境世界

柿沼好子 (理学部)

鹿児島湾に出現する鉢水母は変動する水塊の

中で世代交代を行い、柔軟性に富んだ多様な生活を営んでいる。これらの生物と環境の関わりについて発生、生理、生態、行動などの視点から検討した結果、鉢水母は桜島の降灰や人間活動による汚濁物を粘液でからめ取り、沈降させ、海域の環境浄化や物質循環を促進させる。これらの営みは鉢水母の構造が持つ機能であり、また、環境変動に対する適応的生活戦略とも考えられる。

無価値で産業の発展に有害とされ除去されている生物群が、自然と人間活動の両面に極めて効果的な存在として認識されたことで、生物の“生きざま”を追求する自然史、または生命史のさらなる必要性を問うものとして、また、自然保護のあり方について考えてみた。

第93回 1996年9月30日

第93回研究会は、東南アジア史学会の第56回研究大会が鹿児島でおこなわれるのにあわせて、本センター、東南アジア史学会、九州国立博物館誘致推進本部の共同主催による「特別公開講演会とジャワ古典舞踊の夕べ」として開催された。会場の鹿児島市民文化ホールには200人をこえる参加者が集まり、盛会となった。

#### 鎖国時代の東南アジアと日本：『華夷変態』の世界

石井米雄（上智大学アジア文化研究所）

「鎖国」という言葉は、江戸期の日本が、いかにも閉鎖的な世界であるかのような印象を与えがちである。しかし1639年の鎖国完成の後といえども、多い年には100隻をこえる唐船とオランダ船が長崎に入港し、外国の産物と情報を日本にもたらししていたという事実を忘れることはできない。中国沿岸と東南アジアの諸港を起帆地とするこれらの外国船は、「風説書」という形で外国の状況を日本の支配者たちに提供することをもとめられていた。唐通事を通じて唐船の乗員から得られた外国情報は、「唐船風説書」という名の報告書にまとめられ、長崎奉行から秘密裡に江戸幕府に上達されたという。

『華夷変態』の表題のもとに編纂された「唐船風説書」は、現在、東京の皇居内にある内閣文庫に収められており、活字本が東洋文庫から3冊本として刊行されて一般に利用可能となった。

長崎に入港した唐船はその起帆地によって、「口船」（江蘇、浙江）、「中奥船」（広東、福建）、「奥船」（東南アジア）の三種に分類された。このうち「奥船」の起帆地をみると、大陸部では東京、広南、占城、カンボジア、シャム、パタニ、ソクラ、リゴールなど、島嶼部では、マラッカ、カラパ、バンテン、カラパ（バタビア）などが上げられる。唐船奥船の風説書にもられた海外情報は1674年から1728年に至る約50年間におよんでいる。その内容は中国に関するものが多いが、東南アジアについても、同時代の貴重な現地情報が数多く含まれている。『華夷変態』を東南アジア史研究に利用した先行研究には、陳荊和、永積昭、久光由美子氏らの業績があるが、今後さらに多くの研究者によって利用されることを期待するものである。

#### ジャワ古典舞踊の夕べ

岡村さゆき、桑原香苗のお二人により以下のジャワ古典舞踊の演目が踊られた。

1. ガンビョン・パンクル（Gambyong Pangkur）  
踊り手：岡村さゆき

ガンビョンは、ジャワの村々の農耕儀礼の際に登場していた女性大道芸人の踊りを源流として、のちに宮廷で洗練された舞踊形式である。ガンビョンには「豊穡」という意味があることから、現在は結婚式でよく踊られている。いくつかの種類があるが、この踊りは伴奏にパンクルという曲を使うためにガンビョン・パンクルと呼ばれる。

2. グレ・アユンアユン（Golek Ayun-ayun）  
踊り手：桑原香苗

グレは、12、3才の少女が大人になる日を夢見て、髪を梳いたり化粧をしたり、優雅なしぐさの稽古をしたりする様子を描いた踊りで、ジョグジャカルタ形式の舞踊を代表する演目のひとつである。グレ・ナウンアスモロという別名も

あるが、普通は伴奏曲名からグレ・アユンアユンと呼ばれる。グレは元々1時間以上の長い演目であったが、現在は10分前後の短いバージョンが普通である。

### 3. ブクサン・スリカンディ・スロデワティ (Beksan Srikandhi vs Suradewati)

踊り手：岡村さゆき・桑原香苗

二人で踊る戦いの踊りをブクサンと呼ぶ。このブクサンでは、インドの大長編『マハーバーラタ』の物語と登場人物を借用してジョグジャカルタの宮廷で作られたエピソードが演じられる。ある国の王が、アルジュノ王子の息子の妻を奪おうと、妹スロデワティと共に攻めてくる。これを、アルジュノの第二夫人で弓の名人のスリカンディが破り、負けたスロデワティはアルジュノの妻の一人になる。



花束の贈呈を受ける石井米雄先生、岡村さゆき、桑原香苗さん（左から右へ）

そく、飼育も困難で増殖は難しい。日本は年産額約1000トンで減少の傾向にあり、禁漁期・禁漁区などを厳しくした資源管理型漁業による保護が必要である。天然で成長したプエルルス幼生や稚えびを海中に設置したコレクターで集め飼育増殖する試みが行われているがまだ試験段階である。

南半球では低水温域に生息するミナミイセエビの仲間がいる。ニュージーランド・オーストラリア・南アフリカ共和国・南米アルゼンチンなど南極を取り囲むようにして分布している。漁獲高は年産約6万トンと多く、日本でも大量に輸入している。ミナミイセエビは低温域に生息するので成長がおそく、成体になるまでに8～10年を要する。いったん資源が減少するとなかなか回復しないので各国とも資源保護には力をいれている。

北半球の大西洋にはアメリカンロブスターとヨーロッパロブスターが存在することはよく知られている。筆者らは第3のロブスター *Homarus capensis* の存在を推定して1981～1983年に南アフリカ共和国海岸を採集調査した。現地の人たちはこれは絶滅種で現存しないとのことであった。その時の調査では採集できなかったが、その後1992年にこの希少種が調査隊員によってケープタウン近くで採集された。最初の発見から実に200年ぶりに採集されたわけで1993年のロブスター・ワークショップ（北里大学）で話題となった。

## 日本のイセエビ・世界のイセエビ

税所俊郎（水産学部）

イセエビは甲殻類十脚類に所属する大型種で美味で知られている。日本には6種の存在が知られ、本州九州ではイセエビが主であるが南下するに従ってカノコイセエビ、ニシキエビ、シマイセエビ、ゴシキエビ、ケブカイセエビ等の割合が増えてくる。いずれも外洋性暖海種である。夏に産卵しふ化するとフィロゾーマ幼生、プエルルス幼生を経て稚えびになるが成長がお

## 海外出張雑感

### 十年ぶりの東南アジア

中野和敬（南海研）

1986年4月を最後に、現在の南太平洋海域研究センターの核心研究地域であるオセアニアでの現地調査に集中するため、東南アジアでの調査活動はあえて控えてきたのであるが、メラネシアの中央に位置するソロモン諸島でのフィールドデータ収集が一段落したのと、スマトラの2か所で進行中の別々の研究プロジェクト双方へ加わってくれないかとそれぞれ誘われたのを機に、両プロジェクトの小生の分担分をいっぺんに済ませようと、去年の8月から9月にかけて、合計ほぼ40日間、5回めのスマトラへ出かける気になった。実に十年ぶりの東南アジアであった。出かける前にマスメディアから伝わることや近年しきりにインドネシアへ行っている数人の友達からの「それは今浦島ですね。」という冷やかしかからも、ほぼ20年前からなじんでいたスマトラも随分変わったろうなと想像していたが、その変わりようを印象づけるものの第一はインド洋岸にある赤道に近い町パダン（人口は鹿児島市よりやや少ないらしい）にメーターつきのタクシーが表通りではいくらかつかまえられることであった。前回の時には、タクシーは一台も走ってはいなかった。他方、パダンを中心とする西スマトラ州の調査を終えてから行った北スマトラ州にある大湖トバ湖岸の観光地としてのにぎわいは、8月という観光客のやってくる最盛期であったにもかかわらず、豪華ホテルが二、三軒目立つようにはなっていたものの、小生も参加した同地の観光開発プロジェクトでざっとまわったほぼ20年まえと比べてびっくりするほどには変わっていないなという印象であった。そこは、やはり落ちついたリゾート地であった。

もう1か所ぜひまわってみたいと願っていたのは、論文や一般向けの本も合わせて何篇も出

した1984～86年の主調査地、パダンより東の高原にある小さい湖の周辺域であった。そこは高度が海拔1,500mであるため、朝の気温は15℃以下までしばしばさがるほど涼しい。そこでの朝の水あびはまことにつらいので、イスラーム教とは縁遠い小生などは、長期滞在中は、めったにない日中の午後のよく晴れた日が巡って来るまで水あびを敬遠していたものである。今回十年ぶりに行ってみて、前泊まった今も変わらぬたたずまいの湖畔にある木賃宿よりはいくらかましな旅館が湖から少し離れた市場町にできていたので、そちらの方に泊まったが、やはり給湯設備はなかった。日本を出発する前に重重わかっていただけではあったけれども、うっかりセーターをかばんにいれなかったために、熱帯のまただ中でありながら、朝晩はありったけの下着を重ね着して寒さをしのいだ。それでも、1回はふるえながら朝の水あびをしてモスリムの同行者に軽蔑されないよう気を配った。十年ぶりにその小さな湖のまわりを巡ってみて、州政府が期待をかけていたほど観光客が数多くやってくるようにはなっていなかったけれども、熱帯にある高原という地の利をいかしたキャベツ栽培は前よりもずっと隆盛となっていて、日本なら1億円近くはかかるとおもわれるような都会風のたて方をした“キャベツ御殿”が何軒もたっていたのにはびっくりした。その地区では住民のおとなの70%がメッカへの巡礼にすで



「キャベツ御殿」

に出かけたということであった。

先に書いたトバ湖の方でも、高度900mの湖から300m以上も高いところの分水界にある林業研究所の宿泊所に泊まったので、またまたセーターを持参してこなかったとしみじみ悔やむ羽目になった。やはり十年ぶりの東南アジアで、ぬけたところがあったのである。

## マレーシア沿岸海域の海洋汚染

市川敏弘（理学部）

マレーシアはこの10年間急速な経済成長を続けて工業国に変貌してしまった。首都クアラルンプールでは高層ビルや地下鉄などの建設ラッシュで、20年前初めて訪問したときは姿が一変している。高度成長は必然的に環境汚染を伴い、特に首都では大気汚染と交通渋滞が深刻になっている。また、南シナ海大陸棚では石油と天然ガスの採掘が本格化し、タンカーの通路のマラッカ海峡だけでなく、マレーシアの海域すべてが海洋汚染の危機にさらされるようになった。

昨年と一昨年の2回、「日産科学振興財団」から研究助成を受けて、マレーシア農科大学の海洋研究者と共同でマレーシアの海洋汚染の調査を行なった。こちらからは理学部の坂元助教授（分析化学）と佐藤助教授（海洋生物）に協力をお願いし、マレーシア農科大学からは旧知の4人の海洋研究者の協力を得た。調査場所をマラッカ海峡に面したポートディクソンと南シナ海側のクアラトレンガヌの2ヶ所に設定し、



マラッカ海峡に面したポートディクソン沿岸での調査

ゴカイ、貝など底生生物の分類、これらの生物や海水、堆積物に含まれる水銀、カドミウム等重金属、石油系炭化水素、有機物などを調べた。マラッカ海峡側は汚染が進行しているので水銀等汚染物質の濃度が相当高く、南シナ海側は低いだろうと当初予測していた。ところが、海水に含まれる総水銀濃度は、マラッカ海峡側と南シナ海側とで差は見られない。意外なことに、最も高い濃度は汚染が少ないと思われた南シナ海側で検出されている。これらの値は沿岸海域でごく普通に測定される範囲内であり、海水からは異常と言えるほどの高い値は検出されていない。しかし、海洋の汚染物質は食物連鎖の過程で濃縮されていくので、生物に含まれる濃度が問題である。生物や堆積物中に含まれる汚染物質については現在データ整理中であり、これらの結果は今年度8月マレーシア農科大学で行なわれる「海洋環境のアセスメントとモニタリング」に関する国際会議で坂元助教授らによって発表される。

## 第五回国際フィリピン学会に参加して

西村 知（教養部）

昨年の4月14日より16日の3日間、ホノルル市のヒルトン・ハワイアン・ビレッジホテルにおいて、第五回国際フィリピン学会（Fifth International Philippine Studies Conference）が開催され、ビサヤ地方の農業発展について報告する機会を持った。ハワイ大学フィリピン研究センター（Center for Philippine Studies）が主催し、日本、フィリピン、米国、オーストラリア、オランダなどの国々から様々な学問分野のフィリピン研究者が一堂に会した。昨年は、フィリピン革命100周年およびハワイのフィリピン人移民90周年にあたり、フィリピンの歴史が中心テーマとされたが、これ以外にも多くの研究分野の報告がなされた。4、5人の報告者が配置されたパネルが45用意され、活発な議論が展開された。

フィリピン革命については、参考資料の紹介

と解析、文学の果たした役割、女性や少数民族と革命との関係、文化や教育の問題などに関わる問題が議論された。移民の歴史に関しては、移民一世代の苦悩、世代交代に伴うアイデンティティー、フィリピン人コミュニティ形成などの諸問題に関する報告がなされた。私が報告したパネル「フィリピン社会の階級・社会変容・土地問題」(Classes, Social Change and Land in Philippine Society)においては、私の報告の他に、農地改革の将来展望、労働組合、新中間層形成などについて報告され、フィリピンが旧植民地的な諸条件を払拭し、真の民主主義的な近代国家へ変容しつつあるのか否かが議論の

中心となった。私が特に興味を持ったパネルは「フィリピン研究の現状」(The Current State of Philippine Studies Internationally)であった。このようなパネルは、国際的かつ学際的なフィリピン研究のさらなる発展に貢献するものと考えられる。

この学会に参加して、フィリピンのような第三世界の研究を行うにあたっては、多角的なアプローチの重要であることを再確認した。フィリピン研究から、学問的なパラダイムを構築するためにはこのような国際学会は非常に意味のあることである。

## 南太平洋海域研究センター専任・兼務教官の 海外出張及び研修記録一覧表

(1996年8月～1996年12月)

所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
教 養 部	新田 栄治	H 8 . 8 . 4 ～ H 8 . 8 . 26	タ イ	東南アジアにおける半乾燥地の発展と停滞に関する研究
教 養 部	桑原 季雄	H 8 . 8 . 5 ～ H 8 . 8 . 28	インドネシア マレーシア	インドネシアのパダンでの国際学術協力プロジェクトへの参加およびマレーシア、クアラルンプールのマラヤ大学でのセミナーへの参加
南 海 研	青山 亨	H 8 . 8 . 5 ～ H 8 . 9 . 2	インドネシア オーストラリア ミャンマー	『東南アジア史における「中央」と「地方」に関する研究』(国際学術研究)の海外調査ならびにシドニー大学等の現地調査および資料収集
法文学部	森脇 広	H 8 . 8 . 5 ～ H 8 . 9 . 5	ニュージーランド クック諸島	「南太平洋クック諸島における文化遺産の保存と継承に関する調査研究」(国際学術研究)に関する調査研究
南 海 研	中野 和敬	H 8 . 8 . 5 ～ H 8 . 9 . 15	インドネシア	野外生物学研究および教育プロジェクト参加、ならびに研究打ち合わせおよび資料収集
理 学 部	大塚 裕之	H 8 . 8 . 9 ～ H 8 . 8 . 20	中華人民共和国	国際学会(IGC:万国地質学会議)出席
教 養 部	黒田 景子	H 8 . 8 . 19 ～ H 8 . 9 . 9	タ イ ミャンマー マレーシア シンガポール	タイ、マレーシア、シンガポールおよびミャンマーにおける遺跡調査と資料収集



所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
水産学部	松岡 達郎	H 8.8.22～H 8.9.8	トリニダッド・トバコ	国際協力事業団、トリニダッド・トバコ漁業訓練計画のため
教 養 部	根建 心具	H 8.9.3～H 8.9.15	ロ シ ア 連 邦	「極東ロシア沿海地域における鉱物資源の賦存状況に関する研究」(国際学術研究)の現地調査
農 学 部	衛藤 威臣	H 8.9.5～H 8.9.14	中華人民共和国	有用動植物の実態と利用に関する共同研究(国際学術研究)
農 学 部	林 満	H 8.9.5～H 8.9.14	中華人民共和国	国際交流、学術研究打ち合わせおよび作物生産に関する現地調査
農 学 部	富永 茂人	H 8.9.5～H 8.9.14	中華人民共和国	有用動植物の実態と利用に関する共同研究(国際学術研究)
教 養 部	新田 栄治	H 8.9.30～H 8.10.7	インドネシア	インドネシアにおける装飾芸術の成立と展開に関する調査
教 養 部	黒田 景子	H 8.9.30～H 8.10.19	タ イ マ レ ー シ ア	「タイ国東北部および北部におけるオーラルヒストリーに基づく村落史の研究」(国際学術研究)による資料収集、研究打ち合わせおよび研究成果の中間報告
理 学 部	市川 敏弘	H 8.10.1～H 8.10.24	マ レ ー シ ア タ イ	マレーシア沿岸海域の環境動態解析(特に有機懸濁物の分布と変動)
理 学 部	山根 正気	H 8.10.9～H 8.10.28	ス イ ス イ タ リ ア	アリ類の標本調査
農 学 部	萬田 正治	H 8.10.25～H 8.11.22	タ ン ザ ニ ア	JICA 短期派遣専門家としての水田におけるアヒル利用技術指導
水産学部	山尾 政博	H 8.11.12～H 8.11.29	タ イ	国際協力事業団短期派遣専門家として技術協力を行なうため
水産学部	川村 軍蔵	H 8.11.15～H 8.12.14	コ ロ ン ビ ア	国際協力事業団を通じた個別専門家派遣事業、コロンビア国立大学水産学部設置指導
水産学部	門脇 秀策	H 8.11.17～H 8.11.26	アメリカ合衆国	米国養殖事情視察
水産学部	松岡 達郎	H 8.11.17～H 8.12.1	インドネシア	拠点大学方式による学術交流のため
工 学 部	櫻井 仁人	H 8.11.30～H 8.12.9	イ ン ド	自然および人為的海岸災害に関する国際会議への出席および発表
水産学部	野呂 忠秀	H 8.12.11～H 8.12.17	フ ィ リ ピ ン	南太平洋海域研究センター特定研究調査に伴う調査許可等の打ち合わせ
水産学部	市川 英雄	H 8.12.12～H 8.12.20	インドネシア	文部省科研費による調査研究
水産学部	重見 之雄	H 8.12.12～H 8.12.20	インドネシア	文部省科研費による現地共同調査研究
水産学部	山尾 政博	H 8.12.12～H 8.12.20	インドネシア	文部省科研費による調査研究
工 学 部	浅野 敏之	H 8.12.15～H 8.12.20	香 港	第2回水力学国際会議への出席および「沿岸植生の持つ波浪減衰効果」についての論文発表

## 南海研センターの出版物

南太平洋研究17巻1号(1996)

### 論文

Kazutaka NAKANO and Nobufumi MIYAUCHI: Changes in Physical and Chemical Properties of Surface Soil in a Swidden and Subsequent Fallow in a Northwestern Region of Malaita Island, Solomon Islands

Akio HATTA: *Pyrgo rasheedi*, n. sp. (Foraminifera)

Hiromitsu IWAMOTO: Japanese Southward Expansion in the South Seas and its Relations with Japanese Settlers in Papua and New Guinea, 1919-1940

Diep Dinh HOA: New Findings of Zang in the Phung Nguyen Culture

### 研究ノート

Diep Dinh HOA: Dynamics of Yao Genealogy (A Case Study of a Yen Stream Village)

南太平洋研究17巻2号(1997)

Ding YANG, Chi-kun YANG and Akira NAGATOMI: The Rhagionidae of China (Diptera)

Yoshiko KAKINUMA, Junzo TSUKAHARA and Syozo HAYASAKA: *Nautilus* Behavior in Aquaria

Hiroshi MIYAKE, Kenji IWAO and Yoshiko KAKINUMA: Life History and Environment of *Aurelia aurita*

Tie-Jun LI and Motoo KITANO: Oriental Kimura's Disease and its Relation to Angiolympoid Hyperplasia with Eosinophilia (ALHE)

Hiromitsu IWAMOTO: The Pacific War in relation to Japanese Settlers in Papua and New Guinea

Occasional Papers No. 30 (1996)

The Progress Report of the 1995 Survey of the Research Project, "Man and the Environment in Micronesia" (ed. Toru AOYAMA)

これは平成6年度から継続して進められている本センターの特定研究「ミクロネシアの人間と環境」の平成7年度の研究報告書である。平成7年度の調査は1995年10月9日から11月7日にかけてミクロネシアのパラオ共和国でおこなわれた。報告書の内容は第1部「陸域環境の変化と農業」8篇, 第2部「海洋生物資源とその環境保全」8篇, 第3部「国家間システムの浸透と文化的アイデンティティの動態」4篇, 第4部「外海洋域の環境」1篇, 計21篇である。B5版, xi-141。

Part 1. Appropriate Agricultural Development in Relation to the Terrestrial Environment

Kazutaka NAKANO: A Note on Taro Cultivation in Belau

Michio ONJO, Mitsuru HAYASHI, Kanetosi KUSIGEMATI and Meresbang NGIRALMAU: Changing Aspects of Agriculture Production in Palau

Michio ONJO, Nobufumi MIYAUCHI, Takako KITAGAKI, Kanetosi KUSIGEMATI and Mitsuru HAYASHI: A Preliminary Report on the Soils of the Islands of Palau

Kanetosi KUSIGEMATI, Seiki YAMANE, Demei O. OTOBED, Kammen M. TAKTAI and Haruo ADELBAI: Notes on Eumenidae, Vespidae, Scoliidae, Sphecidae, Eulaliidae, Calchididae and Icheumonidae of Palau Islands (Insecta, Hymenoptera)

Shuichi IKUDOME and Kanetosi KUSIGEMATI: Notes on Some Bees from the Palau Island (Hymenoptera, Apoidea)

Haruo TAKIZAWA and Kanetosi KUSIGEMATI: Notes on Chrysomelidae of Palau Islands (Insecta, Coleoptera)

Kenji OHARA and Kanetosi KUSIGEMATI: Syrphidae of Palau Islands (Insecta, Diptera)

Munetomo NEDACHI, Kammen M. TAKTAI, Hirofumi YAMANOUCHI and Ken-ichi MATSUMURA: Mineralization and

Volcanism in Babeldaob Island, Belau  
Part 2. Development of Marine Biological Resources and Conservation of the Marine Environment

Akio INOUE and Becky B. MADRAISAU:  
Ciguatera and its Causative Organism Distribution in Palau

Hideo OHBA: The Benthic Marine Flora of the Palau Islands (Wci): New Records, Missing Records and Implications for Biodiversity

Tsuyoshi UEHARA, Junzo TSUKAHARA and Makoto TSUKASHIMA: Distribution and Characteristics of Sea Urchins, Genus *Echinometra*, from Palau

Junzo TSUKAHARA, Tsuyoshi UEHARA and Makoto TSUKASHIMA: Comparative Study of the Spine of *Echinometra* in Palau, Okinawa and Kagoshima

Akio HATTA, Kiyoshi SHIMADA, Masaki UCHIYAMA, Keisuke YOSHINAGA, Shigeru FUJIEDA, Shigeki TERADA, Shirou SUWA and Hirotaka FUJISAKI: Meridional Hydrographic Sections and Planktonic Foraminiferal Assemblages in the West Pacific Ocean in 1995

Johann HOHENEGGER: Remarks on the Distribution of Larger Foraminifera (Protozoa) from Belau (Western Carolines)

Jun TAKEDA and Kempis MAD: Traditional Palauan Lunar Calendar and the Fishing-Gleaning Activities on Reef Flats and/or in Lagoons in the Western Caroline Islands, Micronesia

Tatsuro MATSUOKA, Munetoshi MIYAKE, Akio INOUE and Katsumi KIRA: Gillnet Selectivity for Multi-Species Coastal Fisheries in Palau

Part 3. Development of the System of Administration and its Relationship to Cultural Autonomy

Toru AOYAMA: Annotated Inventory of a Collection of Palauan Legends in the Belau National Museum

Yasuhiro TAJIMA: Japanese Immigration to Palau after the World War II

Yasuaki TAKAHASHI: On the Possibility of Economic Development and Self-Reliance of the Republic of Palau

Akio HOSOYA: The Life of the Palauans and *Siúkang* (Custom)

Part 4. Some Biological Aspects of Oceanography

Masaki UCHIYAMA, Keisuke YOSHINAGA, Shigeru FUJIEDA and Kiyoshi SHIMADA: The Oceanographic Conditions in the Section from the West of Okinawa to Palau Islands in 1995

## センターの動向

### 平成8年度外国人研究員

平成8年度外国人客員研究員として1996年5月14日から本センターに滞在されていた南太平洋大学名誉教授 Ronald Crocombe (ロナルド・クロコム) 氏は12月13日に帰国されました。

### 平成9年度外国人研究員

平成9年度外国人客員研究員としてウィーン大学古生物学研究所の Johann Hohenegger 教授を招聘することが11月28日の協議会で決定されました。招聘期間は1997年9月から翌年3月までの予定です。

### 平成8年度の特定研究

フィリピン共和国パラワン島で実施する予定であった平成8年度の特定研究は中止となりました。これは、学内の事情により計画実施の最終的な日程確定が遅れたところに、フィリピン側の調査許可発行制度の変更という事情が重なり、年度内に許可を取ることが困難と判断されたためです。『南海研だより』31号にも記したように、すでに調査隊の準備も進んでいた段階のことであり、大変に残念な結果となりました。

---

南海研だより No. 32 平成 9 年 3 月 25 日発行

発行：鹿児島大学南太平洋海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目 21-24 電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(256)9358

電子メール [nankai@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp](mailto:nankai@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp)

WWW <http://bio.sci.kagoshima-u.ac.jp/kurcsp/>